

第102回 令和7年10月14日(火)

「エピストクラシーとは何か。」

国や自治体において最も民意を反映する大切な機能が選挙です。この選挙について一定の知識や学歴を持った人間だけに投票権を与える考え方をエピストクラシーといいます。

例えば識字率が極端に低く、治安が安定しない国でギャングのボスが当選しかねない場合、窮余の策として議論されています。

かつて日本では納税額や男女によって選挙権が与えられないことがありました。女性だから、収入が少ないから選挙の正しい判断ができないと考えられていたからです。

当然これが間違っていることはわかります。時の権力者が自分の不利な票を生み出さないためにやっていることだと思います。

しかし世界は残念ながらこちらの方向に進んでいるような気がします。権力者が自分に反対する勢力の口をふさぎ、限りのない政権を樹立させようとしている。同じ人物が長く権力の座にありと腐敗する事実は歴史が証明しています。

この人たちに投票させるべきではないと考える権力者の判断が果たして正しいのか、それを見極める方法が選挙です。誰でも大切な1票を投票する権利は認められるべきです。

戦前に日本は徹底的な言論統制をかけられました。隣組制度によって戦争に反対する人物は憲兵に密告され処罰を受けました。その家族は非国民と呼ばれ、疎外されました。

政党も様々な意見を出すことができなくなり、やがて戦争に協力する大政翼賛会という組織にまとめられていきました。新聞やラジオも大本営の発表に従って、日本の戦況有利な情報のみを国民に公開しました。

戦争に反対していた政治家も少なくなかったと思います。しかし当時の日本は選挙によってその方向を変えるすべを失っていました。国民にも多大な犠牲が生じました。

時として権力は方向を誤ることがあります。歴史上多くの国が長期にわたる権力の腐敗によって滅びています。それは日本も例外ではありません。

我々が絶対守らなくてはならないものは「言論の自由」であり、「個人の権利」です。恐ろしいことですが少しずつそれが失われているような気がしてなりません。